みじかい木ぺん

宮沢賢治

一

キッコの村の学校にはたまりがありませんでしたから雨がふるとみんなは教室で遊びました。ですから教室はあの水車小屋（ごや）みたいな古臭（ふるくさ）い寒天（かんてん）のような教室でした。みんなは胆取（きもと）りと巡査（じゅんさ）にわかれてあばれています。

「遁（に）げだ、遁げだ、押（おさ）えろ押えろ。」「わぁい、指嚙（ゆびか）じるこなしだでぁ。」

がやがやがやがたがた。

ところがキッコは席（せき）も一番前のはじで胆取りにしてはあんまり小さく巡査にも弱かったものですからその中

にはいりませんでした。 机(つくえ)に座(すわ)って下を向(む)いて 唇(くちびる)を噛(か)んでにかにか笑(わら)いながらしきりに何か書いているようでした。

キッコの手は霜(しも)やけで赤くふくれていました。 五月になってもまだなおらなかったのです。 右手のほうのせなかにはあんまり泣(な)いて潰(つぶ)れてしまった馬の目玉のような赤い円いかたがついていました。

キッコは一寸(すん)ばかりの鉛筆(えんぴつ)を一生(いっしょう)けん命(めい)にぎってひとりでにかにかわらいながら8の字を横(よこ)にたくさん書いていたのです。（めがね、めがね、めがねの横めがね、

めがねパン、くさりのめがね、）ところがみんなはずいぶんひどくはねあるきました。キッコの机はたびたび誰かにぶっつかられて暗礁に乗りあげた船のようにがたっとゆれました。そのたびにキッコの８の字は変な洋傘の柄のように変ったりしました。それでもやっぱりキッコはにかにか笑って書いていました。

「キッコ、汝の木ペン見せろ。」にわかに巡査の慶助が来てキッコの鉛筆をとってしまいました。「見なくてもい、よごせ。」キッコは立ちあがりましたけれども慶

助はせいの高いやってそれに牛若丸(うしわかまる)のようにうしろの机の上にはねあがってしまいましたからキッコは手がとどきませんでした。「ほ、この木ペン、この木ペン。」慶助はいかにもおかしそうに顔をまっかにして笑って自分の眼(め)の前でうごかしていました。「よごせ慶助わあい。」キッコは一生けん命のびあがって慶助の手をおろそうとしましたが慶助はそれをはなして一つうしろの机(つくえ)ににげてしまいました。そして「いがキッコこの木ペン耳さ入るじゃぃ。」と云(い)いながらほんとうにキッコの鉛筆を耳に入れてしまったようでした。キッコは泣いて追(お)いかけましたけれども慶助はもうひ

らっと廊下へ出てそれからどこかへかくれてしまいました。キッコはすっかり気持をわるくしてだまって窓へ行って顔を出して雨だれを見ていました。そのうち授業のかねがなって慶助は教室に帰って来遠くからキッコをちらっとみましたが、またどこかであばれて来たとみえて鉛筆のことなどは忘れてしまったという風に顔をまっかにしてふうふう息をついていました。
「わあい、慶助、木ペン返せじゃ。」キッコは叫びました。「知らないじゃ、うなの机さ投げてたじゃ。」慶助は云いました。キッコはかがんで机のまわりをさがしましたがありませんでした。そのうちに先生が入って

来ました。

「三郎、この時間うな木ペン使ってがら、おれさ貸せな。」キッコがとなりの三郎に云いました。

「うん、」三郎が机の蓋をあけて本や練習帖を出しながら上のそらで答えました。

二

課業がすんでキッコがうちへ帰るときは雨はすっかり晴れていました。

あちこちの木がみなきれいに光り山は群青でまぶし

い泣（な）き笑（わら）いのように見えたのでした。けれどもキッコは大へんに心もちがふさいでいました。慶助（けいすけ）はあんまりいばっているしひどい。それに鉛筆（えんぴつ）も授業（じゅぎょう）がすんでからいくらさがしてももう見えなかったのです。どの机（つくえ）の足もとにもあのみじかい鼠（ねずみ）いろのゴムのついた鉛筆はころがっていませんでした。新学期（しんがっき）からずうっと使（つか）っていた鉛筆です。おじいさんと一緒（いっしょ）に町へ行って習字（しゅうじ）手本や読方の本と一緒に買って来た鉛筆でした。いくらみじかくなったってまだまだ使（つか）えたのです。使えないからってそれでも面白（おもしろ）いいい鉛筆なのです。

キッコは樺の林の間を行きました。　樺はみな小さな青い葉を出しすきとおった雨の雫が垂れいい匂がそこらいっぱいでした。　おひさまがその葉をすかして古めかしい金いろにしたのです。

それを見ているうちに、

（木ペン樺の木に沢山あるじゃ）　キッコはふっとこう思いました。　けれども樺の木の小さな枝には鉛筆ぐらいの太さのはいくらでもありますけれども決して黒い心がはいってはいないのです。　キッコはまた泣きたくなりました。

そのときキッコは向うから灰いろのひだのたくさんあ

るぼろぼろの着物(きもの)を着た一人のおじいさんが大へん考え込(こ)んでこっちへ来るのを見ました。（あのおじいさんはきっと鼠捕(ねずみと)りだな。）キッコは考えました。おじいさんは変(へん)な黒(くろ)い沓(くつ)をはいていました。そしてキッコと行きちがうときいきなり顔をあげてキッコを見てわらいました。「今日学校で泣(な)いたな。目のまわりが狸(たぬき)のようになっているぞ。」すると頭の上で鳥がピーとなきました。キッコは顔を赤くして立ちどまりました。

「何を泣いたんだ。正直に話してごらん。聞いてあげるから。」

鳥がまた頭の上でピーとなきました。するとおじいさ

んは顔をしかめて上を向いて「おまえじゃないよ、やかましい、だまっておいで」とどなりました。すると鳥はにわかにしいんとなってそれから飛んで行ったらしくぼろんという羽の音も聞え樺の木からは雫がきらきら光って降りました。「いってごらん。なぜ泣いたの。」

おじいさんはやさしく云いました。「木ペン失くした。」キッコは両手を目にあててまたしくしく泣きました。「木ペン、なくした。そうか。そいつはかあいそうだ。まあ泣くな、見ろ手がまっ赤じゃないか。」

おじいさんはごそごその着物のたもとを裏返しにして

ぼろぼろの手帳を出してそれにはさんだみじかい鉛筆を出してキッコの手に持たせました。キッコはまだ涙をぼろぼろこぼしながら見ましたらその鉛筆は灰色でごそごそしておまけに心の色も黒でなくていかにも変な鉛筆でした。キッコはそこでやっぱりしくしく泣いていました。「ははあんまり面白くもないのかな。まあ仕方ない、わしは外に持っていないからな。」おじいさんはすっと行ってしまいました。

風が来て樺の木はチラチラ光りました。ふりかえって見ましたらおじいさんはもう林の向うにまがってしまったのか見えませんでした。キッコはその枝きれみ

たいな変な鉛筆を持ってだまってかくしに入れてうちの方へ歩き出しました。

三

次の日学校の一時間目は算術でした。キッコはふとああ木ペンを持っていないないと思いました。それからそうだ昨日の変な木ペンがある。あれを使おう一時間ぐらいならもつだろうからと考えつきました。

そこでキッコはその鉛筆を出して先生の黒板に書いた問題をごそごその藁紙の運算帳に書き取りました。

48×62＝　「みなさん一けた目のからさきにかけて。」と先生が云いました。「一けた目からだ。」とキッコが思ったときでした。不思議なことは鉛筆がまるでひとりでうごいて96と書いてしまいました。キッコは自分の手首だか何だかもわからないような気がして呆れてしばらくぼんやり見ていました。「一けた目がすんだらこんどは二けた目を勘定して。」と先生が云いました。するとまた鉛筆がうごき出してするするっと288と二けた目までのとこへ書いてしまいました。キッコはもうあんまりびっくりして顔を赤くして堅くなってだまっていましたら先生がまた「さあできたら寄せ算を

して下さい。」と云いました。またはじまるなと思っていましたらやっぱり、もうただ一いきに一本の線もひっぱって2976と書いてしまいました。

さあもうキッコのよろこんだことそれからびっくりしたこと、何と云っていいかわからないでただもうお湯へ入ったときのようにじっとしていましたら先生がむちを持って立って「では吉三郎さんと慶助さんと出て黒板へ書いて下さい。」と云いました。〔キッコは筆記帳をもってはねあがりました。」そして教壇へ行ってテーブルの上の白墨をとっていまの運算を書きつけたのです。そのとき慶助は顔をまっ赤にして半分

立ったまま自分の席（せき）でもじもじしていました。キッコは9の字などはどうも少しなまずのひげのようになってうまくないと思いながらおりて来たときようやく慶助が立って行きましたけれども問題（もんだい）を書いただけであとはもうもじもじしていました。

先生はしばらくたって「よし」と云いましたので慶助は戻（もど）って来ました。先生はむちでキッコのを説明（せつめい）しました。

「よろしい、大へんよくできました。」キッコはもうにがにがにがにがわらって戻って来ました。（もう算術（さんじゅつ）だっていっこうひどくない。字だって上手（じょうず）に書ける。

算術帳とだって国語帳とだって雑作（ぞうさ）なく書ける）

キッコは思いながらそっと帳面（ちょうめん）をみんな出しました。

そして算術帳国語帳理科帳とみんな書きつけました。

すると鉛筆（えんぴつ）はまだキッコが手もうごかさないうちにじつに早くじつに立派（りっぱ）にそれを書いてしまうのでした。

キッコはもう大悦（おおよろこ）びでそれをにがにがならべて見ていましたがふと算術帳と理科帳と取りちがえて書いたのに気がつきました。 この木ペンにはゴムもついていたと思いながら尻（しり）の方のゴムで消そうとしましたらもう今度（こんど）は鉛筆がまるで踊（おど）るように二、三べん動（うご）いて間もなく表紙（ひょうし）はあとも残（のこ）さずきれいになってしまいまし

た。さあ、キッコのよろこんだことこんないい鉛筆をもっていたらもう勉強も何もいらない。ひとりでどんどんできるんだ。僕はまず家へ帰ったらおっ母さんの前へ行って百けたぐらいの六かしい勘定を一ぺんにやって見せるんだ、それからきっと図画だってうまくできるにちがいない。僕はまず立派な軍艦の絵を書くそれから水車のけしきも書く。けれども早く耗ってしまうと困るなあ、こう考えたときでした鉛筆が俄かに倍ばかりの長さに延びてしまいました。キッコはまるで有頂天になって誰がどこで何をしているか先生がいま何を云っているかもまるっきりわからないという

風でした。

その日キッコが学校から帰ってからのはしゃぎようと云ったら第一におっかさんの前で十けたばかりの掛算と割算をすらすらやって見せてよろこばせそれから弟をひっぱり出して猫の顔を写生したり荒木又右エ門の仇討のとこを描いて見せたりそしておしまいもうお話を自分でどんどんこさえながらずんずんそれを絵にして書いていきました。その絵がまるでほんもののようでしたからキッコの弟のよろこびようと云ったらありませんでした。

「さあいいが、その山猫はこの栗の木がらひらっと

こっちさ遁げだ。 鉄砲打ぢはこうぼかげだ。 山猫はとうとうつかまって退治された。 耳の中にこう云う玉入っていた。」 なんてやっていました。

そのうちキッコは算術も作文もいちばん図画もうまいので先生は何べんもキッコさんはほんとうにこのごろ勉強のために出来るようになったと云ったのでした。二学期には級 長にさえなったのでした。 その代りもうキッコの威張りようと云ったらありませんでした。学校へ出るときはもう村中の子供らをみんな待たせて置くのでしたし学校から帰って山へ行くにもきっとみんなをつれて行くのでうちの都合や何かで行かなかっ

た子は次の日みんなに撲らせました。ある朝キッコが学校へ行こうと思ってうちを出ましたらふとあの鉛筆がなくなっているのに気がつきました。さあキッコのあわて方ったらありません。それでも仕方なしに学校へ行きました。みんなはキッコの顔いろが悪いのを大へん心配しました。

算術の時間でした。「一ダース二十銭の鉛筆を二ダース半ではいくらですか。」先生が云いました。みんなちょっと運算してそれからだんだんさっと手をあげました。とうとうみんなあげました。キッコも仕方なくあげました。「キッコさん。」先生が云いました。

キッコは勢(いきおい)よく立ちましたがあともう云えなくなって顔を赤くしてただもう〔以下原稿なし〕

底本：「イーハトーボ農学校の春」角川文庫、角川書店
１９９６（平成８）年３月25日初版発行
底本の親本：「新校本　宮澤賢治全集」筑摩書房
１９９５（平成７）年５月
入力：ゆうき
校正：noriko saito
２００９年８月23日
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。